

$\sigma$ -加法族  $\mathcal{F}_T$  に関する補足

補題 1.3  $T, S$  が  $\{\mathcal{F}_n\}$ -停止時刻のとき、

$$\mathcal{F}_{T \wedge S} = \mathcal{F}_T \cap \mathcal{F}_S$$

証明  $A \in \mathcal{F}_{T \wedge S}$  とすると、任意の  $n \geq 0$  に対して

$$A \cap \{T \leq n\} = (A \cap \{T \leq n\} \cap \{S \leq n\}) \cup (A \cap \{T \leq n\} \cap \{S > n\})$$

であり、

$$A \cap \{T \leq n\} \cap \{S \leq n\} = A \cap \{T \wedge S \leq n\} \cap \{T \leq n\} \cap \{S \leq n\}$$

とかくと、 $A \in \mathcal{F}_{T \wedge S}$  と  $T, S$  が  $\{\mathcal{F}_n\}$ -停止時刻であることより、 $A \cap \{T \wedge S \leq n\}, \{T \leq n\}, \{S \leq n\}$  はすべて  $\mathcal{F}_n$  の元であり、

$$A \cap \{T \leq n\} \cap \{S \leq n\} \in \mathcal{F}_n$$

また、

$$A \cap \{T \leq n\} \cap \{S > n\} = A \cap \{T \wedge S \leq n\} \cap \{T \leq n\} \cap \{S > n\}$$

とかけ、 $\{S > n\} = \{S \leq n\}^c \in \mathcal{F}_n$  なので、

$$A \cap \{T \leq n\} \cap \{S > n\} \in \mathcal{F}_n$$

となり、 $A \cap \{T \leq n\} \in \mathcal{F}_n$  がわかり、 $A \in \mathcal{F}_T$  となる。 $A \in \mathcal{F}_S$  も同様に示せる。したがって、

$$\mathcal{F}_{T \wedge S} \subset \mathcal{F}_T \cap \mathcal{F}_S$$

一方、 $A \in \mathcal{F}_T \cap \mathcal{F}_S$  とするとき、

$$A \cap \{T \wedge S \leq n\} = A \cap \{T \leq n\} \cap \{S \leq n\}$$

なので、右辺は  $\mathcal{F}_n$  に属する。よって  $A \in \mathcal{F}_{T \wedge S}$  つまり、

$$\mathcal{F}_T \cap \mathcal{F}_S \subset \mathcal{F}_{T \wedge S}$$

となり、等式が証明できた。  $\square$

系 1.4  $T, S$  が  $\{\mathcal{F}_n\}$ -停止時刻で、 $T \geq S$  a.e. ならば、 $\mathcal{F}_T \supset \mathcal{F}_S$

### 1.3 条件つき期待値

たとえば、競馬でよく「今日は雨だから重馬場になる。この馬に有利だ」とか、パチンコで「あそこのパチンコ屋は右から 3 列目の奥から 3 番目の台がよく出る。」とかいう。つまり、賭事にはそのときの条件によって、結果の出る確率が変わることを体験的にギャンブラー達は知っている。このときの情報を基にしてギャンブルを行えば、得られる賞金の期待値も増えることを知っている。直観的にはこれが条件つき期待値の考え方である。

まず、 $P(A) > 0$  となる事象が起きるという条件付きの確率について考える。これは

$$P(B | A) = \frac{P(A \cap B)}{P(A)}$$

によって定義される。たとえば、 $X$  が有限個の値をとる確率変数のとき、 $A$  が起きるとい条件付きで期待値を考えると、

$$E[X | A] = \sum_x x P(X = x | A)$$

とすれば、 $A$  が起きるとい条件付きで期待値が求められる。 $A$  が変わるとこの値も変化する。

時刻  $n$  までの情報が与えられているとき、そのすべてを使って次に起こることを予測したい。そうすると分かっているのは  $\sigma$ -加法族  $\mathcal{F}_n$  についてのすべての情報である。これをうまく使う方法を考える。

- 定義したいのは  $E[X | \mathcal{F}_n]$ .
- これは、時刻  $n$  までの情報が変われば違う値をとるはず。—ランダム!
- $\mathcal{F}_n$  以外の情報は使わない —  $\mathcal{F}_n$ -可測!
- $A \in \mathcal{F}_n$  のとき、

$$\int_A E[X | \mathcal{F}_n](\omega) P(d\omega) = \int_A X(\omega) P(d\omega) \quad (1.3)$$

これは  $E[\{E[X | \mathcal{F}_n]\}; A] = E[X; A]$  とも書ける。

最後の条件は直観的ではないが、Radon-Nikodym の定理により、 $\mathcal{F}_n$ -可測な確率変数  $Y$  で

$$\int_A Y(\omega) P(d\omega) = \int_A X(\omega) P(d\omega)$$

が任意の  $A \in \mathcal{F}_n$  に対して成り立つものが「唯一」あることが知られている。 $(P(X \neq Y) = 0)$  のとき  $X$  と  $Y$  は同じものとみなすという意味で唯一つである) これを  $E[X | \mathcal{F}_n]$  と書く。(1.3) を  $\mathcal{F}_n$  での条件付きの  $X$  の条件付き期待値  $E[X | \mathcal{F}_n]$  の定義式と考える。

条件付き期待値は任意の  $\mathcal{F}$  の部分  $\sigma$ -加法族  $\mathcal{G}$  に対しても同じように定義できる。

**定義 1.9**  $(\Omega, \mathcal{F}, P)$  を確率空間とし、 $\mathcal{G}$  を  $\mathcal{F}$  の部分  $\sigma$ -加法族とする。 $X$  を可積分な確率変数とすると、 $X$  の  $\mathcal{G}$  による条件付き期待値  $E[X | \mathcal{G}]$  とは、

- (1)  $E[X | \mathcal{G}]$  は  $\mathcal{G}$ -可測、
- (2) 任意の  $A \in \mathcal{G}$  に対して (1.3) 式が成り立つ

の2条件を満たすもののことである。

#### 条件付き期待値の性質

**定理 1.5** (tower property)  $\mathcal{G}, \mathcal{H}$  を  $\mathcal{F}$  の部分  $\sigma$ -加法族で  $\mathcal{H} \subset \mathcal{G}$  とし、 $X$  を可積分な確率変数とすると、

$$E\{E[X | \mathcal{G}] | \mathcal{H}\} = E[X | \mathcal{H}] \quad a.e.$$

**証明** 問題の式の両辺は定義から  $\mathcal{H}$ -可測なので、任意の  $A \in \mathcal{H}$  に対して

$$\int_A E[X | \mathcal{G}](\omega) P(d\omega) = \int_A X(\omega) P(d\omega)$$

という式を示せばよい。しかし、 $A \in \mathcal{H}$  のとき  $A \in \mathcal{G}$  だから、 $E[X | \mathcal{G}]$  の定義からこの式は成り立っている。  $\square$

**定理 1.6**  $\mathcal{G}$  は  $\mathcal{F}$  の部分  $\sigma$ -加法族で、 $X, Y$  を可積分な確率変数とすると、

- (1)  $a, b \in \mathbb{R}$  のとき、

$$E[aX + bY | \mathcal{G}](\omega) = aE[X | \mathcal{G}](\omega) + bE[Y | \mathcal{G}](\omega) \quad a.e.$$

- (2)  $X(\omega) \geq Y(\omega) \quad a.e.$  ならば  $E[X | \mathcal{G}](\omega) \geq E[Y | \mathcal{G}](\omega) \quad a.e.$

**証明** (1) 両辺  $\mathcal{G}$ -可測なので、証明するべき式は  $A \in \mathcal{G}$  のとき、

$$\int_A (aE[X | \mathcal{G}](\omega) + bE[Y | \mathcal{G}](\omega)) P(d\omega) = \int_A \{aX(\omega) + bY(\omega)\} P(d\omega)$$

で、

$$\begin{aligned} \text{左辺} &= a \int_A E[X | \mathcal{G}](\omega) P(d\omega) + b \int_A E[Y | \mathcal{G}](\omega) P(d\omega) \\ &= a \int_A X(\omega) P(d\omega) + b \int_A Y(\omega) P(d\omega) \\ &\quad (\because \text{条件付き平均の定義の式 (1.3) から}) \\ &= \int_A \{aX(\omega) + bY(\omega)\} P(d\omega). \end{aligned}$$

(2) これは (1) の線形性が示せているので、

$$\int_A \{E[X | \mathcal{G}](\omega) - E[Y | \mathcal{G}](\omega)\} P(d\omega) \geq 0$$

が任意の  $A \in \mathcal{G}$  に対して成り立つことを言えばいい。

( $\because$  もし、これがいえていれば、任意の  $\varepsilon > 0$  に対して

$$A = \{\omega : E[X | \mathcal{G}](\omega) - E[Y | \mathcal{G}](\omega) \leq -\varepsilon\}$$

としてみると、上の式の左辺は

$$-\varepsilon P(A) \leq 0$$

より大きくないから、これが0以上であるのは  $P(A) = 0$  つまり、

$$E[X | \mathcal{G}](\omega) - E[Y | \mathcal{G}](\omega) > -\varepsilon \quad a.e.$$

のときのみ。 $\varepsilon > 0$  は任意なので、これから

$$E[X | \mathcal{G}](\omega) - E[Y | \mathcal{G}](\omega) \geq 0 \quad a.e.$$

となる。)

条件付き期待値の性質から

$$\begin{aligned} \text{左辺} &= \int_A X(\omega) P(d\omega) - \int_A Y(\omega) P(d\omega) \\ &= \int_A \{X(\omega) - Y(\omega)\} P(d\omega) \geq 0. \end{aligned}$$